

俳優
有限会社青空市場 代表
永島敏行さん
(昭54・人文)



ながしま としゆき●1956年生まれ、千葉県出身。専修大学文学部人文学科2年のときにオーディションで選ばれ、『ドカベン』で映画デビュー。二作目となる『サード』で数々の新人賞を受賞。その後も映画・舞台・TVドラマで活躍。その一方で、秋田県で米づくりに携わり、一次産業と生活者をつなぐ有限会社青空市場の代表も務める。

「まさか合格とは、思ってもいませんでした。俳優という道を選ぶなど、当時の私は考えもしていなかったんです」

こう大学時代を振り返るのは、俳優であり、有限会社青空市場の代表も務める永島敏行さんだ。大学2年生のときに『ドカベン』で俳優デビュー。野球部主将の長島徹を演じた。

「正直、自分の演技はひどいものでした。幼稚園に通っておらず学芸会の経験すら、ない。それまで野球しかしてこなかっ

たのですから、当たり前です。両親が映画好きで、小さい頃から映画館に連れて行ってもらっていましたが、映画は観賞するものでしかありませんでした」

そう話す通り、永島さんは映画のオーディションに応募していたことすら知らなかった。ある日突然、父親から電話がかかってきて「明後日、東映へ行け」といわれ、初めて勝手にオーディションへ応募されていたことを知ったのだ。

「最初は勝手なことをすると怒りまし

たよ。でも、受かることなどありえないし、東映に行けば、憧れの菅原文太さんや高倉健さんに会えるかもしれないという下心もあって、行くことにしたんです」

映画『ドカベン』の監督・鈴木則文さんは『トラック野郎』シリーズも撮っていたため、そんな期待を抱き、まるで観光気分だったという。

ところが、予想に反して一次審査、二次審査を順調に通過し、最終審査である野球の実技へ。準硬式野球部に所属し

思いがけずに訪れる出会い。 俳優業、そして一次産業への強い思い

大学2年次から50年近く、俳優としてのキャリアを積み、アカデミー賞主演男優賞をはじめ、数々の賞を受賞してきた永島敏行さん。そのかたわら、日本各地の農家・漁業と都会の生活者をつなぐマルシェにも力を注いでいる。なぜ、二足の草鞋という道を選んだのか。俳優になった経緯とともに伺った。

ていた永島さんは、見事に最終審査もパスして「合格してしまった」。

「してしまった」という表現には理由がある。まさか、合格するとは思っていなかったため、野球部の監督にオーディションのことを話していなかったのだ。

「合格後、映画のプロデューサーからすぐに記者発表するといわれて冷や汗をかきました。監督に相談させてくださいとお願いしたら、『何をいっている、俺たちはプロとして映画をつくっているんだぞ!』とものすごく叱られました。1日やるから話をしてこい、と。とはいえ、監督に話すのもためらいがあって……」

というも、当時は連帯責任が当たり前前の時代で、下級生には日々の仕事も山積みだからだ。永島さんの“勝手な”行動によって、同級生に迷惑をかけることが明らかだった。案の定、監督は激怒した。

しかし、体育会の指導をしていた担当部長が「人生経験になるから出てみたらいいんじゃないか」と背中を押してくれたのだという。

「野球もそんなにうまくないから、いいかという話に(笑)。結局、連帯責任だと同級生全員で、私がやる分の仕事を負担してもらいました」

感じるままを表現する 俳優として高い評価を獲得

このデビュー作で演技に目覚め、俳優の道へひた走るとなれば美談なのかもしれないが、現実とは違った。永島さんは自身の演技のつたなさに、打ちのめされることになったのだ。

「撮影後に、未編集の映像をつないで観るラッシュという機会があるのですが、こんな下手くそな役者の作品なんて、自

分なら絶対観ないと思いました」

そうして『ドカベン』でデビューしたものの、芸能事務所に所属するわけでもなく、野球と授業の毎日という以前の学生生活へと戻っていった。実家の旅館をいずれは継ごうと思っていたこともあり、俳優業は良い思い出の1つくらいに捉えていたようだ。そのため、のちに二作目の出演作となる『サード』のオーディションで書類審査を通ったと、再び勝手に応募した父親から連絡を受けたときも、その後の選考には参加しなかった。

「一次審査の日は野球部にとって大事な試合があったので、ベンチ外とはいえ抜け出して受けるわけにはいきませんでした。また同級生に迷惑をかけることになるのも、嫌でしたから」

ところが後日、オーディションを実施した幻燈社から「合格者がいないから事



秋田でのお米づくりをサポートしてくれる農家さんなど、秋田の仲間たちと刈り取り後に撮影。この方たちがいなければ、「米づくりは続けてこれなかった」と永島さん



「各地の生産者が丹精込めてつくった農作物を都会の人に味わってもらいたい」。その思いから全国の生産者と会話を重ね、マルシェへの参加をお願いしている。丸の内行幸マルシェ（千代田区）にて

務所へオーディションにきてください」と連絡がきた。それなら仕方ないと休日に事務所へ行ったところ、今度は主役に抜擢される。

『ドカベン』に出ていたことも話さず、二言三言しゃべっただけでオーディションは終わりました。期待に添わなかったのだろうと思っていたのですが、君に決めたといわれて、驚きましたよ」

なぜ自分が選ばれたのかは、寺山修司の脚本を見てわかった。そこには「野球をしている寡黙な少年」と書かれていた。坊主頭で学生服を着ていった「オーディション時の自分そのもの」だったのだ。

再び合格したことで、永島さんの中では俳優という職業が大きなものになっていった。そのぎざしは『ドカベン』のと

きに芽生えていたと、同氏は振り返る。

『ドカベン』撮影時は、毎晩のように出演者やスタッフとお酒を飲んでいたのですが、そこでいつもいわれるんです。『俳優には向いていないからやめておけ』って。それが悔しくて、自分の中で反骨精神のようなものが芽生えていました」

また、破天荒な創作の世界に魅力も感じた。『ドカベン』は魔球が出たり、飛んだり跳ねたりと現実離れた野球映画だ。「その作品をつくるために、大の大人が一生懸命バカバカしいことをしているんです。そこに、おもしろい世界があるんだと感じていました」

『サード』の撮影が始まってから、監督にいわれた言葉も忘れられないという。

『お前は芝居ができないんだから、芝

居をしようと思うな。芝居はできなくても感じることはできるはずだ。だから主人公が何を思っているのかを感じれば、その通りに動ける』と。演技などまったく勉強したことなかった私にとっては、非常に励みになる言葉でした」

『サード』以降、『事件』や『帰らざる日々』などに次々と出演し、その演技が高く評価された。第2回日本アカデミー賞主演男優賞をはじめ、国内の新人賞を数々獲得することになる。ここから“俳優”永島敏行の人生がスタートすることとなった。

一次産業と都会の生活者をつなぐ“掛け橋”として

永島さんには俳優のほかに、有限会社青空市場の代表という顔がある。全国各地の農業・漁業従事者と生活者をつなぐため、生産者を集めた農水産物や加工品の直売市場である“マルシェ”を主催するほか、農林水産品に関するコンサルティングやネット通販などを行っている。同氏がこのような活動を始めたきっかけは、30年ほど前から始めた米づくりだった。

永島さんがある舞台に出演したとき、それを見ていたプロデューサーから「今の発声では何をいっているかわからないから、本場イギリスでボイストレーニングをしてこい」といわれた。その人物は、日本で上演されるミュージカルのほとんどを買いつけてきている大物だ。

その言葉に背中を押されるまま、イギリス留学を決める。イギリスでは有名な劇作家の自宅にホームステイをすることになり、そこではホームパーティーが頻繁に開催されていた。集まったイギリス人から「日本人とは何か」と質問されるものの、考えたこともない問いに、うまく答えることができない。そこから永島さんは、「日本人とは何だろう」というぼんやりとした疑問を抱えるようになる。

「帰国して数年後に結婚し、子どもが生まれたとき、自分たちが幼少期に経験したような自然との触れ合いは、都会では経験させてあげられないなと感じたんです。私は千葉生まれで、子どもの頃は田んぼで泥んこになって遊んでいました。高度経済成長で道路が舗装されてビルが

建つようになり、泥遊びができるような場所は消えてしまった。でも、子どもには泥んこになって遊ぶ経験をさせてあげたいと、強く思ったのです」

「校友会の活動にも協力していくので、私を利用して地域とのつながりをつくっていただきたい」と校友へメッセージ



建つようになり、泥遊びができるような場所は消えてしまった。でも、子どもには泥んこになって遊ぶ経験をさせてあげたいと、強く思ったのです」

そんなとき、準硬式野球部時代の仲間で、秋田県の役場職員になっていた友人から「秋田で映画祭をやりたいから手伝ってくれ」と声がかかる。二つ返事で引き受けた永島さんは、田んぼが広がる景色を見て、ここで米づくりをすれば、子どもに泥遊びを体験させてあげられるし、日本人の主食である米づくりを通して「日本人とは何か」という疑問の答えも見つかるかもしれないと考えた。

「知り合った農家の方に、米づくりをさせてほしいとお願いしました。最初は断られましたよ。どうせ、気まぐれだろうと思われたんです。でも自分は本気だと、秋田を訪れるたびにお願いしているうちに了承してもらい、150坪ほどの田んぼで米をつくることになりました。やってみて、すぐに後悔しましたけどね（笑）」

機械を使わずに、腰をかがめて手で苗を植えていくのだが、真っすぐ植えるのは非常に難しく、すぐに腰が痛くなる。最初は永島さんと妻、3歳の娘に加えて永島さんの知人という4人で、実質、戦

力は大人3人のみ。150坪は簡単に植えられるような広さではなかった。ただ、農家の人をお願いをしている手前、途中で投げ出すわけにはいかず、半ば意地になって田植えを終えたという。

「ただ、娘は楽しんでいました。最初は泥水に足をつけることに抵抗があったようですが、そんなものはすぐに忘れて、気がついたら泥んこになって遊んでいたのです。その姿を見るのは、私としてもうれしかったですね」

収穫の際も腰をかがめて、稲の根元を刈るため、非常にしんどい作業だったという。刈り取った稲を束ねて干すのも、なかなかの重労働だ。しかし、そんな苦勞がすべて吹っ飛んでしまうほど、自分でつくった米はおいしかった。

「こんなに、うまいものはない！ そう感動せずにはいられませんでした。妻も娘もおいしい、おいしいと食べていて。自分でつくったお米を、自分たちで食べているという達成感も大きかったです」

それから毎年、秋田で米づくりをするようになり、大人になった娘の友人や、その子どもたちも連れていくようになった。しかし、農業を始めてわかったことも多かったのだ。その1つが、「農家に

価格決定権がない」ことである。

「あれだけおいしい農作物をつくっているのに、小売価格を自分たちで決めることはできません。自分のつくった作物を、どのような人たちが食べているのかわかる術もない。それを何とかできないかと考え、マルシェを開くことにしたんです」

どうせ都会の人に食べてもらうなら「土から一番遠い場所」と、銀座でマルシェを開催。ビルの9階という不利な立地にもかかわらず、およそ500人が買いにきてくれた。その後、月1回のマルシェを千代田区の東京国際フォーラムで行うようになり、2011年からは場所を東京駅の行幸地下通路に移して、今では毎週金曜日にマルシェを開催している。

「1日に40万円も売り上げる生産者もいます。コロナ禍でお客は大きく減少しましたが、少しずつ戻ってきました。今後はネット販売など販売チャネルの強化を進めて、一次産業と都会の生活者をつなぐパイプを、より太くしていきたいと思っています。校友にも、ぜひ参加していただけるとありがたいですね」

(2024年11月取材)

永島さんの出演予定

舞台
『もしも彼女が関ヶ原で戦ったら』
2025年2月16日(日)～24日(月・休)
IMM THEATER (東京都文京区)
ベストセラー小説を舞台化。メタバース空間で行う関ヶ原の戦いで、最強の敵である徳川家康に、西軍としてビジネススキルを武器に挑む。

公式サイトはこちら→



映画
『種まく旅人—藤のささやき—』
2025年公開予定
食べることで、食物を育てることは、生きること——。地域に根差し日本の第一次産業を応援する、2012年から続くシリーズの5作目。

朗読
日本農業新聞主催
『四季コンサート～命つながる世界へ』
2025年春開催予定
農業や環境、命を題材にした日本農業新聞の1面コラム「四季」の朗読と、ピアニストの藤波結花さんが奏でる音楽でつづる。